



図10 地山上位の珪藻ダイアグラム

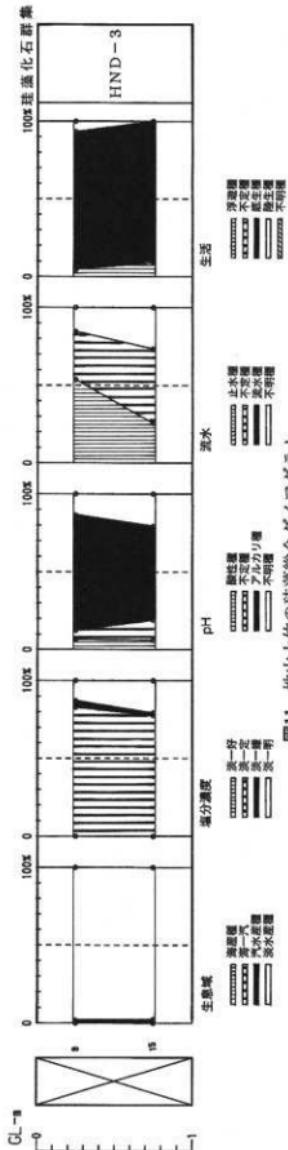


図11 地山上位の珪藻総合ダイアグラム

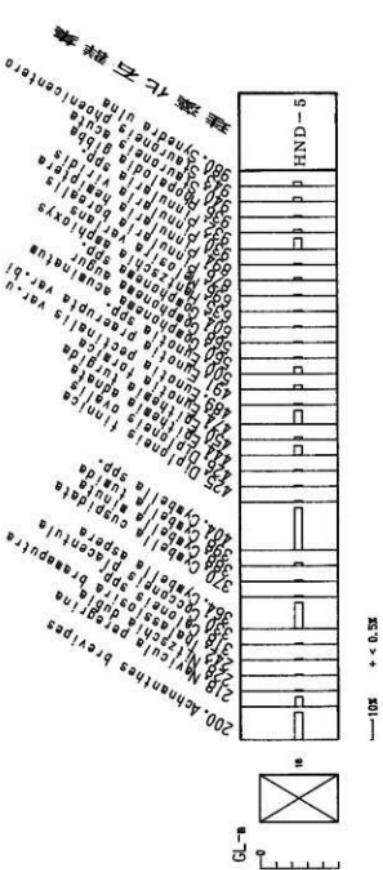


図12 SD21の堆積ダイアグラム

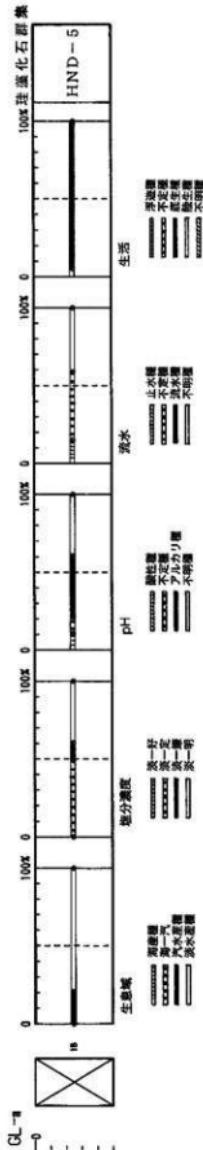


図13 SD21の堆積ダイアグラム

す。

③HND-3 (1、2、8、14、15)

淡水種がほとんどを占める。底生種の *Cymbella* 属、*Epithemia* 属、*Gomphonema* 属の諸種で高率を占める。

④HND-4 (9)

汽水種の *Achnanthes brevipes* が卓越するほか、淡水・底生種の *Cocconeis p-lacustris*、*Epithemia turgida* が高率にを示す。

⑤HND-5 (18)

汽水種の *Achnanthes brevipes* が特徴的に出現する。また、淡水・底生種の *Cymbella* 属の諸種が高率を示す。

5. 各花粉帯と堆積年代について

①藏小路西遺跡との比較

同時期に実施された藏小路西遺跡（川崎地質株式会社、1999）と今回の分析結果との関係は表1 のようにまとめられる。したがってⅠ帶は中世以降、Ⅱ帶は中世頃、Ⅲ帶は弥生～古墳時代頃の植生を表すと考えられる。

②周辺地域との比較

出雲平野内では従来、花粉分析がほとんど行われていなかったが、近年遺跡の発掘調査に伴い花粉分析が行われるようになってきた。今回の調査地の北に隣接する小山遺跡では花粉・珪藻分析が行われ、渡辺・遠藤（1998）により報告されている。今回の花粉帯と渡辺・遠藤（1998）の花粉帯を比較すると、表2のようになる。また、今回の花粉帯と中海湖底および周辺地域、宍道湖湖底および東岸地域で設定された花粉帯（大西、1993）との比較結果も表2に示す。

今回のⅢ帶はスギ属、アカガシ亜属の卓越で特徴付けられることから、小山遺跡のP-Ⅲ帶、中海・宍道湖のスギ亜帯に相当する可能性がある。

今回のⅡ帶はマツ属（複雑管束亜属）、スギ属、アカガシ亜属の卓越で特徴づけられることから、小山遺跡のP-Ⅱ帶あるいはⅠ帶、中海・宍道湖のスギ亜帯あるいはカシ・ナラ亜帯に相当する可

表1 藏小路西遺跡との比較

姫原西遺跡		藏小路西遺跡															
		SD21		A		A大溝		C		D		F1-1		F1-2		F2	
花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代
II												I	中世	I			
				II	中世	II'	中世	II	中世	II							
III	新石器	III	新石器	III	弥生							III	古墳			III	弥生

能性がある。

今回のⅠ帶はマツ属（複維管束亞属）の卓越で特徴付けられることから、小山遺跡では対応する花粉帯がない。また中海・宍道湖のマツ亞帶に相当する可能性がある。

6. 古環境の推定

ここでは、花粉帯毎に遺跡周辺の古環境を推定する。

(1)Ⅲ帶期以前

No.9層準は、弥生時代後期の河川跡のベースを形成している。花粉ダイアグラム中の模式柱状図ではGL-3.0m程度に記述されているが、現実にはGL-1.0m程度に位置する。また、今回発見された弥生時代後期の河川跡は現在の地割りから小山遺跡の河川跡に連続していると考えられる。

今回得られた珪藻化石群集は、小山遺跡の「粘土層3」から得られた珪藻化石群集とよく似ており、関係が注目される。小山遺跡では同時に検出される花粉化石に化石種が多く含まれることから、検出される汽水種珪藻を二次堆積したものと考えた。一方今回は同層準から花粉化石がほとんど検出されなかつたことから、このような観点で検出珪藻化石を捕らえることができなかつた。

得られた珪藻化石群集からそのまま堆積環境を復元すると、汽水環境であった神門水海の縁辺部あるいは神門水海に注ぐ小河川河口部の湿地であったと考えられる。

(2)Ⅲ帶期（弥生時代～古墳時代頃）

出雲平野を望む中国山地縁辺部、および北山山地にはカシ類を要素とする照葉樹林で広く覆われていたと考えられる。また、谷沿いにはスギやトチノキが渓谷林として分布していたと考えられる。スギ属花粉が多産することから平野部の湿地にもスギが生育していた可能性が指摘できるが、スギの生態に不明な点が多いことから断定はできない。

弥生後期の河川？は、珪藻分析から淡水の沼澤湿地環境であったことが明らかである。花粉分析でも断続的にではあるがヒシ属が検出されるなど、淡水の沼澤湿地での堆積が示唆される。また同時期の貝塚（No.1の上位に相当）からヒシが見つかっており（此松、1999）、興味深い。一方後半は *Melosira* 属が高率になるHND-2で特徴づけられる時期になると、水位がやや上がったと考えられる。ただし、後半のHND-2の各試料は河川？の中心部、前半のHND-3の各試料は河川？の縁で採取されている。したがって河川？中央部は水深が深く、縁辺は浅いという堆積場所の違いに起因する可能性もある。

表2 周辺地域との対比

本調査		小山遺跡		中海・宍道湖	
花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代
I	中世～			マツ亜帯	1500～
II	中世	P-I or II		カシ・ナラ亜帯 or スギ亜帯	700～ ～700
III	～古墳	P-III		スギ亜帯	-450～

No.8、15は河川?の相対する縁で得られた試料である。卓越種が異なるものの、同様の推定生息域を持つことから堆積環境の大きな違いは考えられない。

一方No.1、2は木橋の下位から得られた試料であった。2試料の間には珪藻組成、花粉組成共にほとんど差がなく堆積環境の違いはほとんどなかったと考えられる。またこの層準はHND-2に挟まれるHND-3で特徴付けられた短い期間の堆積で、流れの無い沼沢湿地環境が考えられる。これは、木橋の下という特殊な環境を反映したためと考えられる。

河川?沿いにはアシ原が広がり、カヤツリグサ科の草本も交えていたと考えられる。また後半では、イネに由来する可能性の高いイネ科(40ミクロン以上)花粉も高率になり、遺跡近辺で稲作が行われていたことが示唆される。このことは貝塚を構成する18層から炭化米が検出されていること(藤山年代学研究所, 1999)と、矛盾しない。

SD21の珪藻化石群集(HND-5)は、河川?のベースの9層準のHND-4と類似する。また、花粉組成ではスギ属が卓越するなど、ベースの影響が示唆される。現地での観察で分析層準がSD21埋積開始直後の堆積物と考えられており、溝の肩部などからの二次堆積による影響である可能性が高い。検出された珪藻化石の中から汽水種を除くと、淡水域の沼沢湿地環境で堆積したと考えられる。また、花粉ではイネ科(40ミクロン未満)、カヤツリグサ科、ヨモギ属が卓越し、SD21の縁にはアシが茂り、周辺にはヨモギの茂る草原の存在が推定できる。

(3)II帯期(中世頃?)

おそらく人間による干渉により、中国山地縁辺部や北山山地の照葉樹林はアカマツの卓越する二次林へ徐々に変わっていたと考えられる。

遺跡内には水田が広がっていたと考えられる。また、ソバ属花粉も検出されることから、休耕田や畦での蕎麦栽培が示唆される。

7.まとめ

姫原西遺跡において実施した花粉・珪藻分析結果から以下のことを考察した。

(1)同時期に分析が実施された蔵小路西遺跡両遺跡とともに、I～III帯の地域花粉帯を設定した。このうち、姫原西遺跡ではII、III帯が認められた。

(2)HND-I～Vの珪藻化石群集を設定した。

(3)弥生時代以降中世頃までの、出雲平野および周辺地域の古環境変遷を推定した。これらのうち、特筆すべき点は以下のことである。

①花粉分析結果から出雲平野(調査地周辺)で稲作が行われた可能性が高いと言えるのは古墳時代以降である。しかし、弥生時代の稲作を否定するものではない。弥生時代後期の貝塚から炭化米が発見されているように、今後地点を変えての花粉分析や、プラント・オパール分析による精査により水田の広がりも明らかになろう。

②多くの地点では稲作に伴って蕎麦栽培が行われていた。

③調査地点内で見つかった弥生時代後期の河川の水位はさほど高くなく、ヒシが繁茂していた。

④弥生時代後期以降の堆積物はいずれも淡水環境で堆積したと考えられ、この時期にはすでに神門水海が淡水化していた可能性が高い。

引用文献

- 川崎地質株式会社 (1999) 蔵小路西遺跡の花粉・珪藻分析、蔵小路西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告2, 277-289
- 此松昌彦 (1999) 姫原西遺跡貝塚出土の種子について、姫原西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告1, 167-182
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197.
- 大西郁夫・干場英樹・中谷紀子 (1990) 穴道湖湖底下完新統の花粉群、島根大学地質学研究報告, 9, 117-127.
- 大西郁夫 (1993) 中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帶と植生変化、地質学論集, 39, 33-39.
- 渡辺正巳 (1995a) 花粉分析法、考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳 (1995b) 硅藻分析法、考古資料分析法, 86, 87. ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳・遠藤正樹 (1998) 出雲平野中央部小山遺跡における地質層序と古環境、LAGUNA (汽水域研究), 5, 215-223.

第6章 まとめ

一般国道9号出雲バイパスの建設計画を契機に平成5年に発見された姫原西遺跡は、発見当初より弥生時代から古墳時代にかけての集落跡であろうと推定されていたが、今回の発掘調査によってA区から弥生時代後期から古墳時代初頭頃の掘立柱建物跡や井戸跡を検出するとともに、C区からは中世の古墓を発見するという大きな成果が得られた。とりわけ、B区からは神戸川水系の旧自然河道を検出し、河道内から木橋や護岸杭列、貝塚等とともに大量の土器や木製品が出土した。今回十分な整理期間が採れなかつたため出土遺物について十分な検討ができなかつたが、以下に今回の調査で知り得た知見や成果を若干報告することで考察にかえたい。

1. B区出土土器と河道堆積層の時期について

今回の発掘調査の中心的な出土遺物は、B区旧自然河道とA区井戸跡から出土した弥生時代後期～古墳時代前期の土器である。B区河道内の堆積層については61ページでも記したように、10a層を中心とする上層、10b層を中心とする中層、17層を中心とする下層、11層からなる最下層の4層に大きく分けることができ、それぞれの層から出土する土器は以下のとおりである。

- 上層 (10a層) 草田6～7期を中心として後期初頭 (V-1様式) から5世紀代
中層 (10b層) 草田4～6期を中心として後期初頭 (V-1様式) から草田7期
下層 (17層) 草田3～5期を中心として中期後半から草田6期
最下層 (11層) 後期初頭 (V-1様式) を中心として中期から草田2期

これをみると、最下層の堆積が始まったのは後期初頭あたりと考えられ、大溝を除いて、5世紀代にはほぼ全体が埋まつたことがわかる。中期以前の土器については出土点数が極めて少ないので、基本的に二次的に混入した資料と考えられるが、今回の調査地点の周辺にその時期の集落なり遺物散布地が存在していることは間違いない。下層から上層まで、堆積層に対して土器の時期がきれいに分かれないので、最初に述べたように水流により流出と堆積が繰り返される河道内にあっては当然考えられる出来事で、今回の分析でのその特徴がよく現われている。むしろ、弥生時代後期初頭

以降、徐々に河道が埋まつていった様子をつぶさに窺い知ることができるといえよう。この堆積層の年代をもう少し補う資料として遺構の下から出てきた土器がある。B区の木橋や各護岸施設、BW区の護岸施設は中層下面から下層上面に構築されており、遺構の上下で土層が分かれている。第107図のように1・2号橋下の土器は草田4～5期が最も新しいもので、それ以降の土器を含んでいない。したがって、河道下層の時期は草田4～5期、中層は草田6～7期と考えて大過ない。

BW区の貝塚は10b層の下に形成されたもので、時期的には草田6～7期でも古い時期といえる。また、BW区4号橋は10b層上面から打ち込まれていることがわかっているが、上層(10a層)に含まれている土器も中心は草田6～7期であるので、少なくとも草田7期以降の構築と考えられる。そうなれば、1・2号橋と4号橋との構造上の大きな違いも年代差に関係したものとして理解することができよう。

2. B区出土木製品について

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての木製品については、島根県内では松江市西川津町の西川津遺跡やタテチョウ遺跡、同市竹矢町上小紋遺跡などで出土が知られているが、細かな年代までは押さえられていない。また、出雲平野における木製品の大量出土もはじめてで、大変貴重な資料といえる。

出土木製品も前項のように、最下層・下層・中層の3層に分かれて出土しているが、全体的にみると、農具・工具から機織具・漁労具・運搬具・武具・祭祀具・楽器・装身具・食事具・容器類・雑具・建築部材等その種類は多岐にわたっている。なかでも特に多く出土しているのは農具類と容器・食器類で、効物類が多数出土する点は鉄器の普及が説かれている弥生時代後期の特性をよく表わしている。農具類では直柄平鋤、曲柄又鋤、一木鋤、直柄半鋤、直柄又鋤、田下駄、鎌柄、耕すくい、豎杵、横槌などがあり、平鋤のうち広鋤は、柄孔が円形で舟形隆起がつき、泥よけ装着用の蟻溝がつくものと、柄孔のまわりが舟形隆起にならないB型タイプのものの二種類が認められる。どちらも西川津遺跡やタテチョウ遺跡出土木製品によく見られるものであるが、前者は北陸地方に類例の多いもので、当遺跡では中層から出土する。一方、後者は下層から出土している。曲柄又鋤は二又のものと三叉の二つのタイプが認められるが、第112図2のように刃部端に鉄器の刃先を装着したと考えられる例もある。平鋤類も多く出土しているが、注目されるのは又鋤である。これまで、松江市上小紋遺跡で出土した例があるが、類例は少ない。当遺跡では特に黒漆が塗られているところから、祭祀用に製作されたものと考えられ、今後類例の増加が期待される。

容器類では効物桶、椀、蓋、高杯、四脚盤、把手付盤、鉢、ジョッキ形容器、菱形容器、組み合せ式箱などがあり、そのうち桶の出土点数が最も多く、当然ながら底板や蓋も數多く見られる。多くの場合、口径に対して底面径のほうが大きく、底板は下から板を押し当てたうえ、木釘を打つて固定すると手法がいずれも取られていることが判明した。また、内面に黒漆が残存しているものが多く、基本的に内面に漆を塗っていたことも判明した。

ところで、今回出土した木製品で特に興味深いのは祭祀具類である。戈形木製品や舟形木製品などは從来から知られているものであるが、赤色顔料(丹?)を塗った弓や竿、黒漆塗りの刀状木製品や又鋤など類例の少ないものが多い。特に舟形木製品は類例がまったく知られていないものである。竿については、そもそも中国の戦国時代から漢代の墓や秦漢郡の墓から舟形や銅郭が出土することはあっても、朝鮮半島南部や日本列島でそれが出土した例はなく、これまで出土しても律令時

代以降であろうと考えられていたものである。もちろん、当遺跡の筈形木製品はこれら中国製の筈臂ではないことは明らかであるが、形態的には非常に近いものである。また、琴板についても、これまで兵庫県出石郡出石町袴狹遺跡の線刻絵画入り箱製品と福岡県前原市上鐘子遺跡の線刻絵画入り板製品の2例が知られているが、琴板との関連性を指摘されていただけで断定するまでには至つていなかった。今回当遺跡出土板製品を含めてこれらを琴板と断定した大きな要素は、現在出雲地方でしか使われていない琴板に、月と太陽という同じ意匠の響穴が開けられていたことによる。太陽かも知れない絵画が描かれているものとしては有名な鳥取県西伯郡淀江町の稻吉角田遺跡の中期の壺形土器や静岡県芝切遺跡の中期後半の壺形土器があるが、月と太陽が同時に描かれている例は、6世紀後半代の福岡県浮羽郡吉井町珍敷塚古墳に描かれた壁画が最も古い例である。当遺跡の琴板とはかなりの年代的な隔たりがあるが、前漢代の墓である中国湖南省長沙市の馬王堆1号漢墓や3号漢墓からは月と三日月が描かれた帛画が出土しており、これらは中国古代の陰陽思想に基づいて描かれたと言われている。弥生時代後期の段階にそうした中国の思想が日本列島に伝わっていた可能性は十分に考えられるところである。振り返ってみると、河道の下層から中層が形成される時期というのは、山陰地方のいわゆる青銅器祭祀が終了して新しい祭祀形態が出現する時期に当たっており、中国の思想や文物が多量にあるは頻繁に流入してきた可能性は否定できない。当遺跡の筈形木製品をはじめ、琴板の日月の思想、さらには漢代の銅鏡を模した木製三稜鏡の存在などは新しい祭祀形態の出現を推定させるに足る資料であるといえよう。

3. A区井戸跡の時期と井戸祭祀について

A区では3基の井戸跡を確認したが、出雲平野で弥生時代後期から古墳時代前期にかけての井戸跡が発見された例は意外と少なく、下古志遺跡とお隣の蕨小路西遺跡で当遺跡の調査とほぼ同じ頃に1基ずつ発見されたのみである。前者は掘り方二段掘りの井戸と聞くが木組み棒は残っていないかっただよう、後者は楕円形の掘り方に丸太削り抜きの木枠を据えたものである。当遺跡の井戸跡には、底に草田6～7期の土器が破碎されて詰め込まれており、その上面では完形の土器が数個体ずつ埋まつた状態が観察された。完形の土器は井戸から出土する上器の中では一番新しいもので、いずれも草田7期のものである。破碎された土器片は砂が吹き上がり砂分を防いだりする働きがあったものと推定される。完形の土器は井戸を廃棄する際のいわゆる井戸祭祀に使用されたもので、土器の構成としては基本的に壺や甌が中心で、SK11のように直口壺を加える場合もある。その他に特に注目される点として、完形の上器を収めて土を入れた後、最終段階として蔽石（SK11）や石皿様石器（SK19）をいれるという点がある。出雲市西谷3号墓第1主体の覆土上面から水銀朱の付着した石杵が出上した点と共に通じており、非常に興味深い事象である。

4. 中世墓について

C区で発見した中世墓については、大形の墓の底部や蓋に、木や竹を組み合せたものが使われていることが判明した。島根県内における中世墓の検出例は当遺跡を含めて32遺跡130基以上を数え、そのうち土壙墓が120基以上を占めているが、このうち木棺墓やここに記している木組み組合せとでも言うべき木棺墓が発見された例は当遺跡と蕨小路西遺跡のあわせて2遺跡5基だけである。これは両遺跡の古墓が平野の中の砂地に掘られていたことに対して、これまで調査された中世墓のほとんどが丘陵上に立地し、木質などが遺存しにくい環境であったためと推定される。したがって、これまで木棺や副葬品が出土していない土壙墓についても、当遺跡の1号古墓のように

数珠や櫛などがあった可能性もあり、注意が必要である。また、1号古墓ではリング状の無文鏡も出土したが、共伴する土師質土器が資料的に少なく、年代が十分に確定できない状況であった。今後の類例の増加に期待したい。

以上、今回の姫原西遺跡の発掘調査では、出雲平野中央の矢野遺跡を中心とする四絞遺跡群の縁辺の一部を調査し、大拠点集落の変遷の一端を垣間見ることができた。特に神戸川水系の凹自然河道とそこから出土した遺物から多くの情報を得ることができたと確信するが、遺憾ながら今回の報告ではその成果をすべて網羅することができなかつた。木橋や護岸施設に使用された杭をはじめ、多くの木製品を整理できないまま調査を終了することになつたし、貝塚の資料についても、分析結果を生かした検討ができなかつた。今後の課題としたい。

註

- (1) ここで使用している型式名は、赤沢秀則編『南講武草田遺跡 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 5』鹿島町教育委員会 1992年、並びに松本岩雄「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1996年による。本報告書では、両者の併行関係を松本V-1（草山1期）、松本V-2（草山2期）、松本V-3（草山3期）、松本V-4（草山4～6期）と理解し、基本的には草田編年を多く使用しているが、草田遺跡の場合、後期初頭から前葉の資料が限られていて比較資料が少ないため、その時期については松本編年を持ち出している。出雲平野における弥生時代後期から古墳時代前期の七器編年については、出雲市教育委員会が発掘調査した山持川川岸遺跡や白枝荒神遺跡の調査報告書で検討されており、その他に鳥根県東部の安来道路建設工事関係の調査でも新たな編年試案が出されている。
- 参考文献 川上 稔編『山持川川岸遺跡』出雲市教育委員会 1996年、米田美江子・三原一将『白枝荒神遺跡市道松寄下小山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1997年、鳥根県教育委員会・建設省松江国造工事事務所『塩津丘陵遺跡群』1998年、同『門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡』1998年
- (2) 木製品の器種の名称や分類については基本的に、奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊 1993年によつたが、層位別に報告したので結果的に記述する各器種ごとの点数は少くなり、細かい型式名の使用は避けることにした。
- (3) 藤田 淳「出石町禪狭遺跡出土の「箱形木製品」について」『月刊考古学ジャーナル 6 №432』1998年
- (4) 野田純子「前原市上鐘子遺跡出土の線刻絵画面について」『月刊考古学ジャーナル 6 №432』1998年
- (5) 国立歴史民俗博物館 春成秀爾氏のご教示による。
- (6) 奈良国立文化財研究所 金子裕之氏のご教示による。
- (7) 勝部明生「馬王堆一号漢墓帛画への新視点」『樋原考古学研究所論集』8 1988年 吉川弘文館
- (8) 詳しくは同じ出雲バイパス関係報告書シリーズの、間野大丞編『蔵小路西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』島根県教育委員会 1999年 参照のこと。

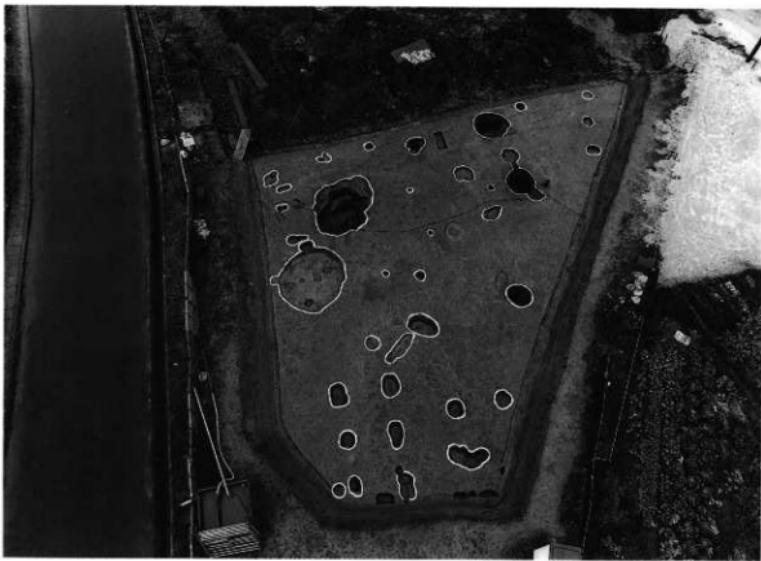


1. A区全景（東から）



2. A区全景（北から）

図版2



1. AN区全景（北から）



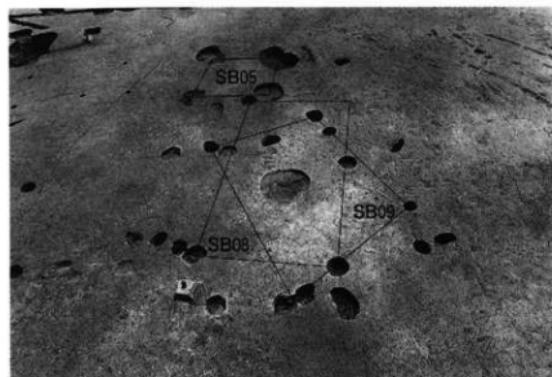
2. C区全景（北から）



1. A区据立柱建物跡群
(北から)

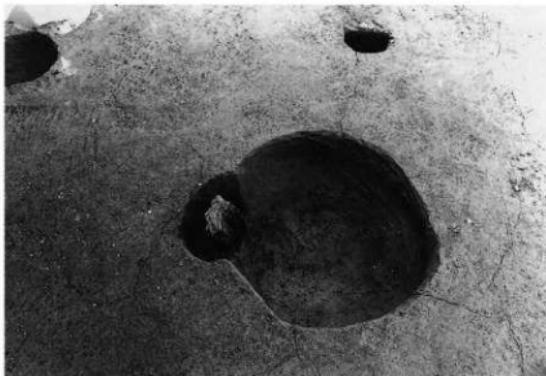


2. A区据立柱建物跡群
(南から)



2. A区据立柱建物跡群
(西から)

図版4



1. SB11ピット
内の柱根

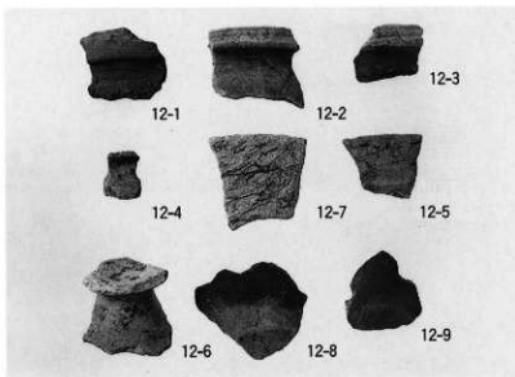


2. AN区SB04
(西から)

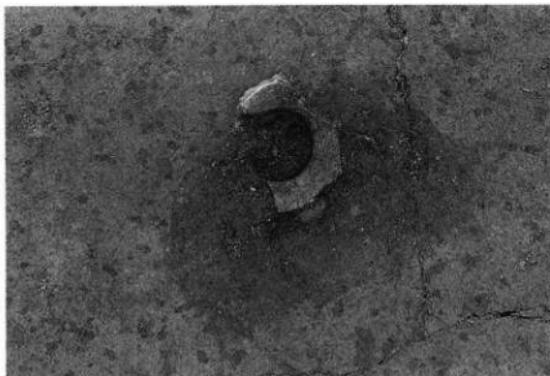


3. AN区SB16
(東から)

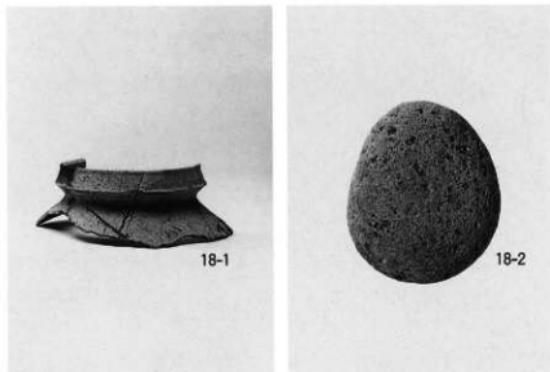
図版5



1. A・AN区掘立柱建
物跡出土土器



2. A区SA01
遺物検出状況



3. A区SA01
出土遺物

図版6



1. AN区SK11
(東から)



2. AN区SK11
完掘状況 (西から)



3. AN区SK11
土層堆積状況

1. AN区SK11

井戸木組内石器出土
状況



2. AN区SK11

井戸木組内土器出土
状況 (第19図①)



2. AN区SK11

井戸木組内土器出土
状況(第19図②・③)



図版8



1. AN区SK11
井戸木組内土器出土
状況（第19図④）

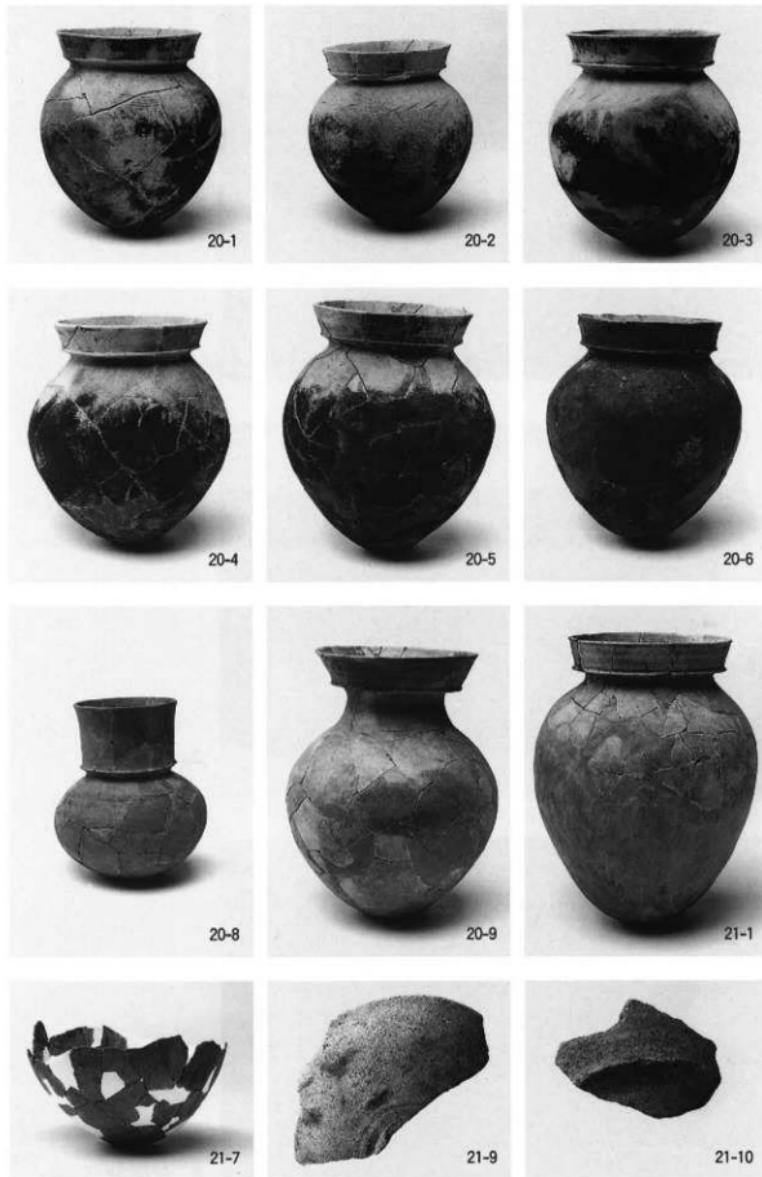


2. AN区SK11
井戸木組内土器出土
状況（第19図⑤）



3. AN区SK11
半截状況（西から）

図版9



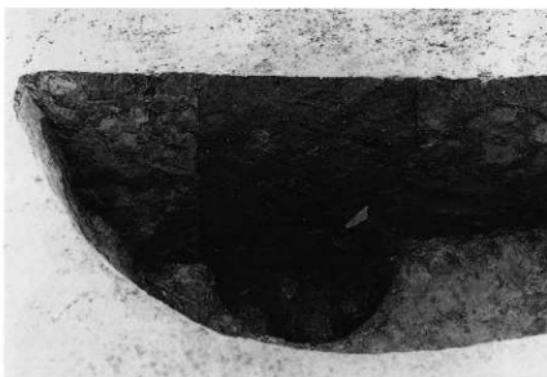
AN区SK11出土遺物

図版10



1. AN区SK17

完掘状況



2. AN区SK17

土層堆積状況



3. AN区SK17

土器出土状況



1. AN区SK17
井戸木組内土器出土
状況



2. AN区SK19
完掘状況



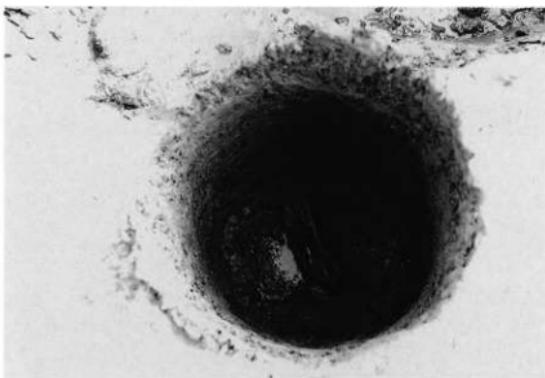
3. AN区SK19
井戸木組上部石器出
土状況

図版12



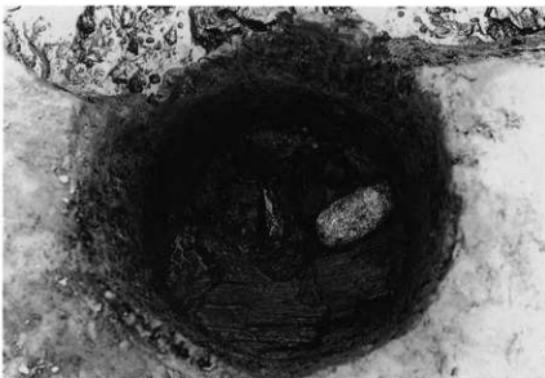
1. AN区SK19

井戸木組



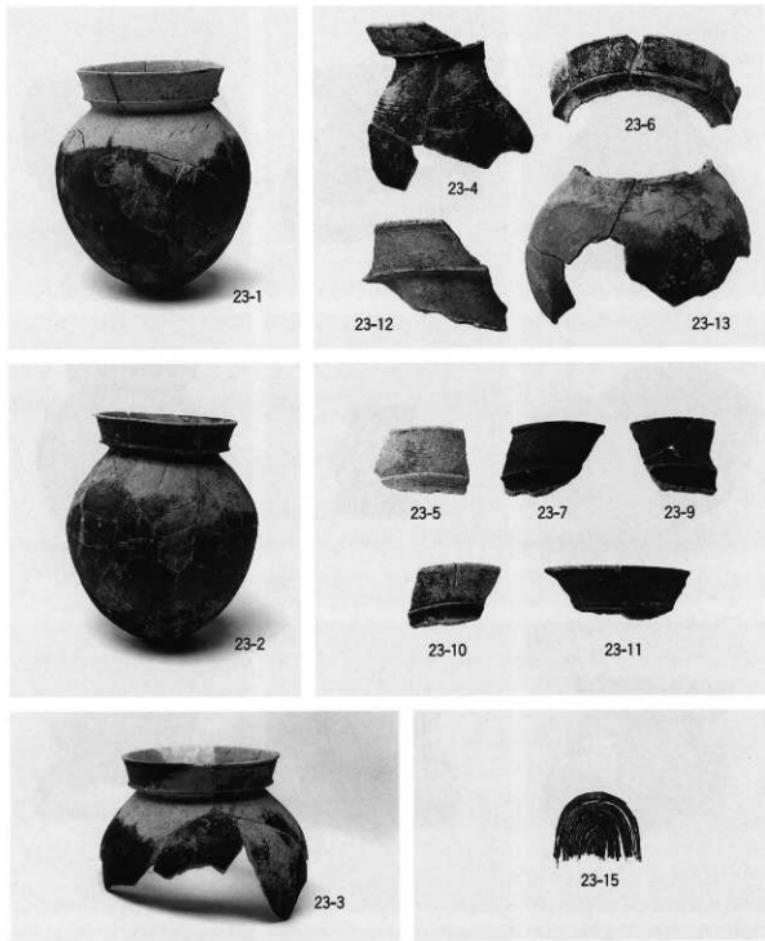
2. AN区SK19

井戸木組内木製品出土状況



3. AN区SK19

井戸木組内石器・木
片出土状況

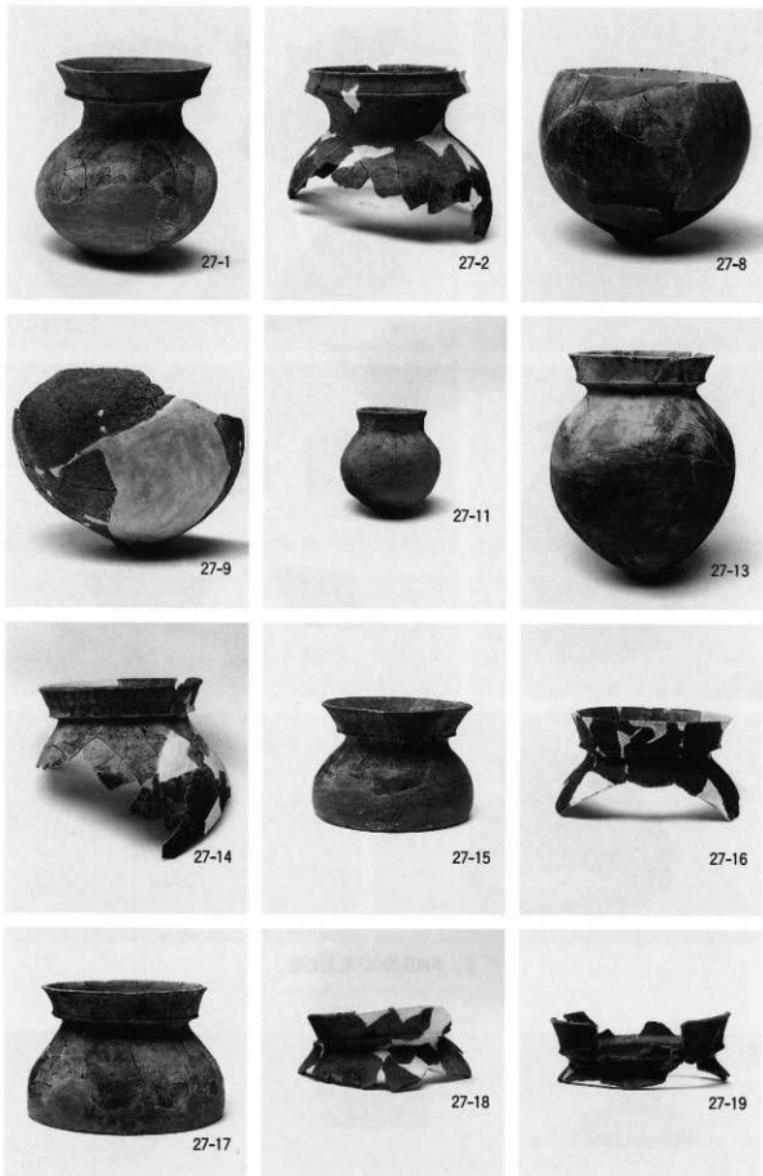


1. AN区SK17出土遺物

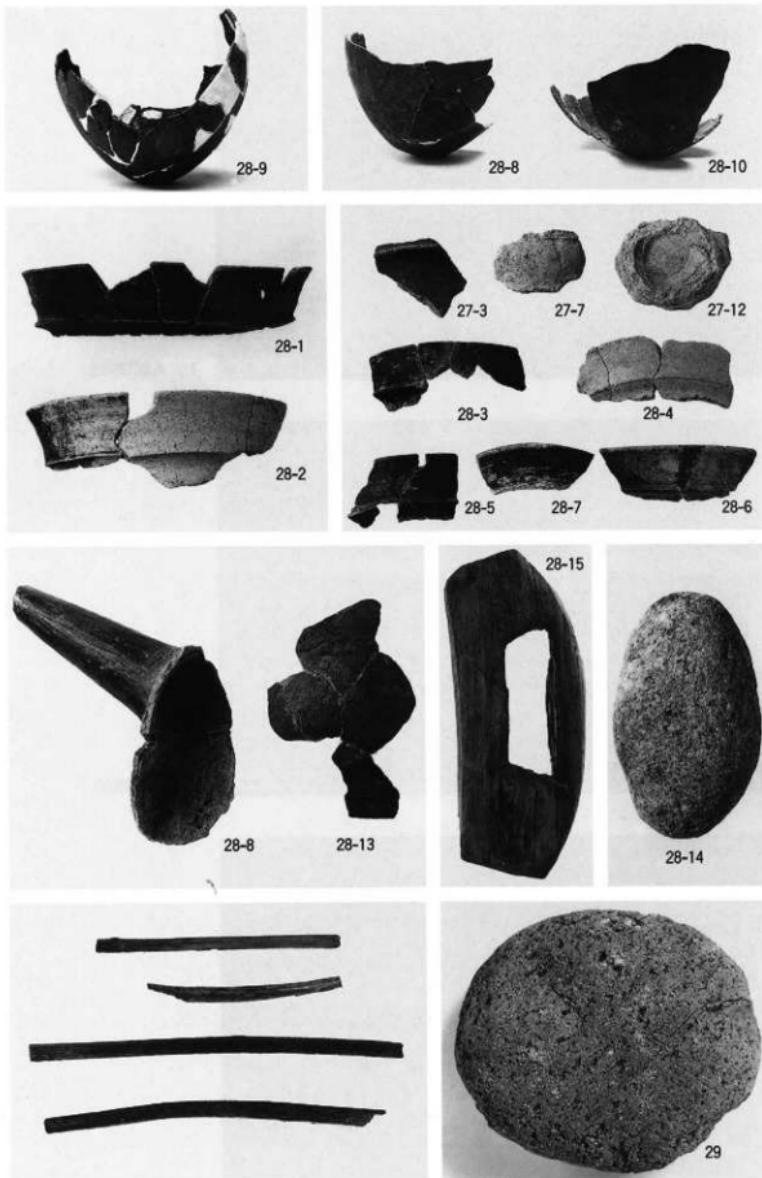


2. AN区SK19出土遺物(1)

図版14

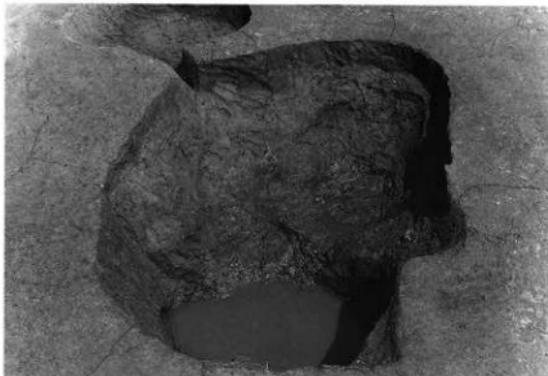


AN区SK19出土遺物(2)

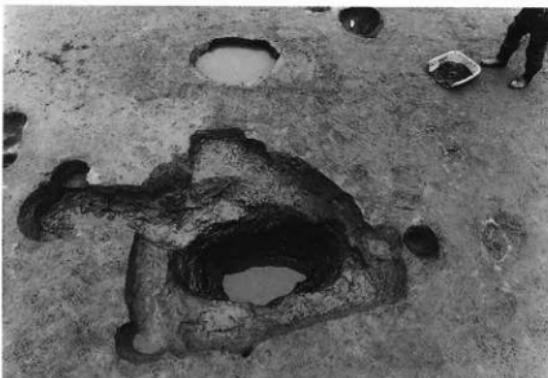


AN区SK19出土遺物(3)

図版16



1. A区SK03



2. A区SK05



3. A区SK06



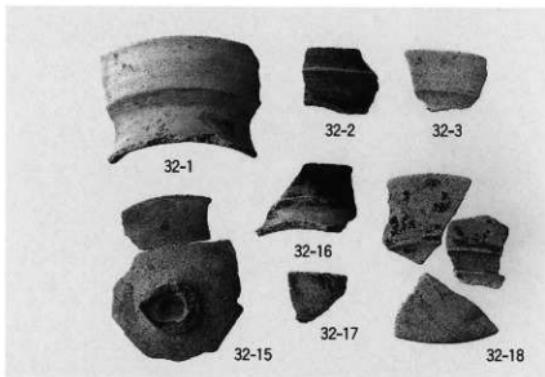
1. AN区SK12



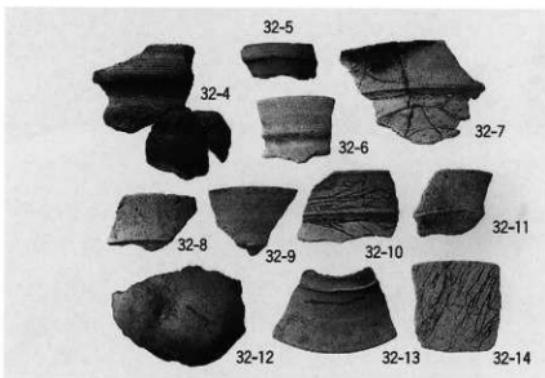
2. AN区SK14



3. AN区SK15



1. A・AN区弥生時代
の土坑出土遺物



2. A・AN区弥生時代
の土坑出土遺物

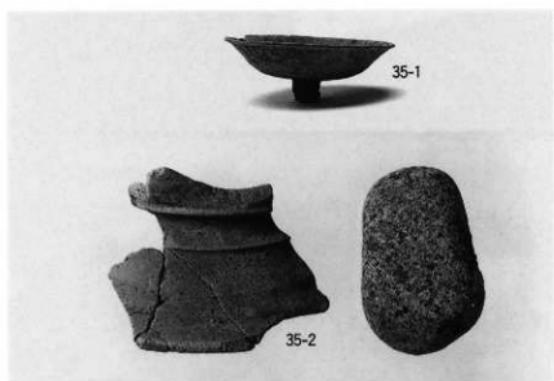


3. A・AN区弥生時代
の土坑出土遺物

1. C区P1
土器出土状況



2. C区P1出土遺物



3. A区SD01



図版20



1. A区SK01



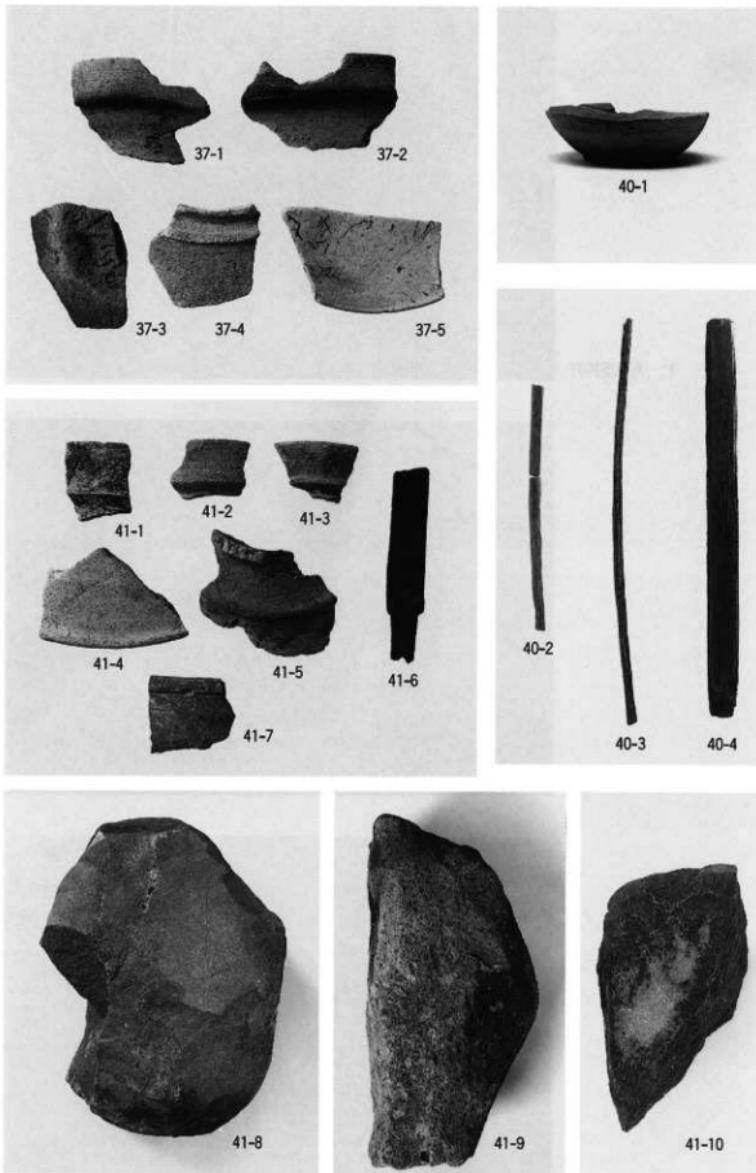
2. A区SK01
土器出土状況



3. A区SK04



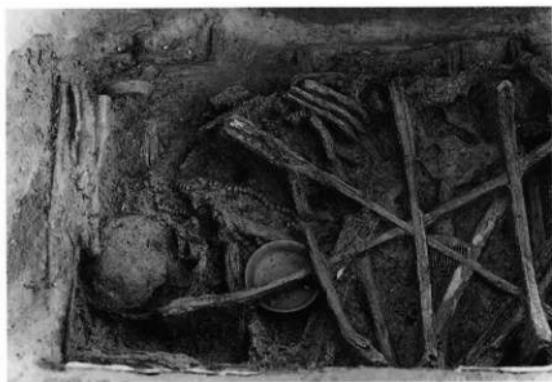
図版22



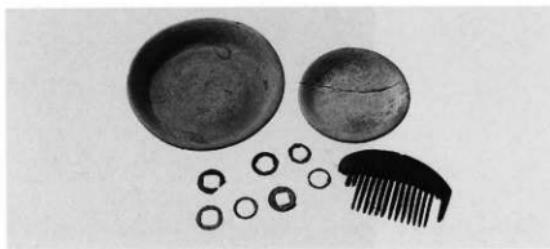
溝状遺構及び土坑出土遺物



1. C区1号古墓



2. C区1号古墓副葬品
検出状況



3. C区1号古墓副葬品
(数珠を除く)



1. C区1号古墓
出土人骨



2. C区1号古墓
出土人骨上半身拡大
写真



3. C区SK20



1. C区2号古墓



2. C区2号古墓
土師質土器出土状况



3. C区3号古墓

図版26



1. C区3号古墓
遺物出土状況



2. C区3号古墓
木組の状況



3. C区3号古墓
木箱検出状況



1. A区SD07

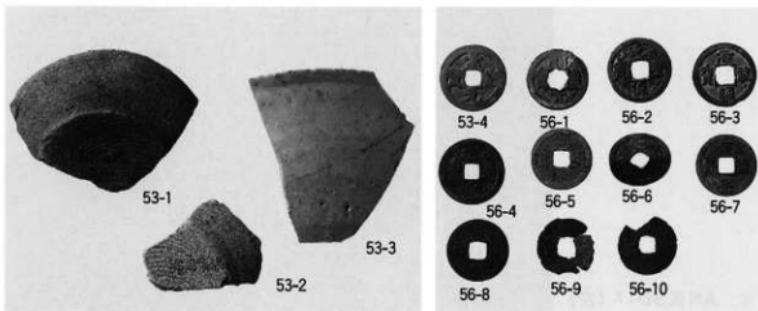
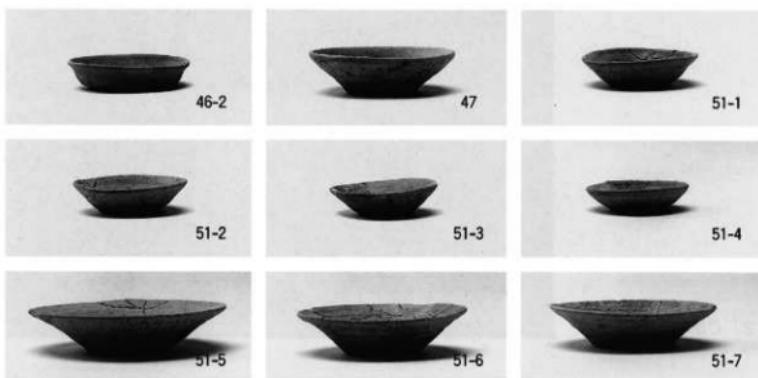
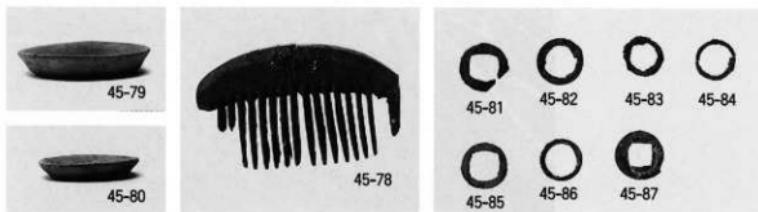


2. C区SD12（右側）



3. AN区SD17（左）
及びSD20

図版28



古墓並びに中世遺構出土遺物及び古銭



1. A区SX01



2. A区SX01
ザル出土状況

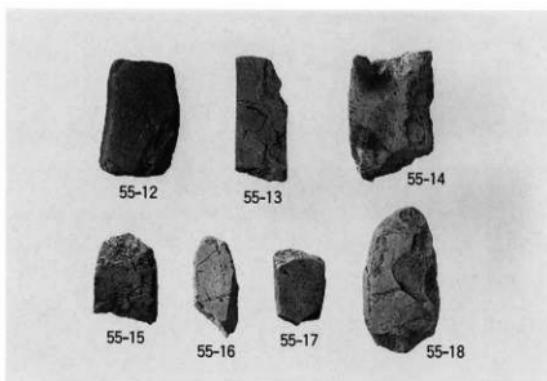


3. AN区SX03

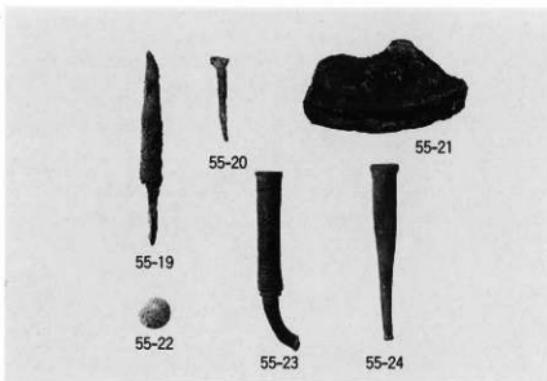
图版30



1. A~C区
遺物包含層出土土器



2. A~C区
遺物包含層出土石器



3. A~C区
遺物包含層出土金属
製品



1. B区全景（南東から）



2. B区全景（南西から）

図版32



1. B区大溝（南東から）



2. B区南北トレンチ
北杭列検出状況



3. B区南壁西端
土層堆積状況

1. B区南西壁
南端土層堆積状況



2. B区1号橋
(南西から)



3. B区1号橋
(北東から)





1. B区1号橋
杭打ち込み状況



2. B区1号橋
断ち割り状況(南側)



3. B区1号橋
断ち割り状況(北側)



1. B区2号橋

(南西から)



2. B区2号橋

(北東から)



3. B区2号橋

断ち割り状況

図版36



1. B区2号橋
(横木)と5号杭列
の関係



2. B区3号橋
(南西から)



3. B区北護岸施設
(北西から)



1. B区3号杭列(手前)
と1号杭列



2. B区3号杭列(手前)
と1号杭列の拡大



3. B区1号杭列
下部木組

図版38



1. B区4号杭列
(東から)



2. B区南護岸施設
(北西から)



3. B区2号橋
南岸部分



1. B区6号杭列
(南東から)



2. B区6号杭列
(北東から)



3. B区
現地説明会用巡回路

図版40



1. B区曲柄叉鉤
出土状況



2. B区木製高環
出土状況



3. B区黒色方形鉢
出土状況



1. B区彎形木製品
出土状況



2. B区1号杭列内指物
腰掛出土状況



3. B区円形四脚盤
出土状況

図版42



1. B区円形四脚盤（残り）出土状況



2. B区6号杭列内
ジョッキ形容器出土
状況



3. B区指物腰掛座板
出土状況



1 BW区4号橋及び7・8号杭列検出状況



2 BW区貝塚検出状況（北東から）

図版44



1. BW区 4号橋（右）
と 5号橋（左端）



2. BW区 4号橋近景



3. BW区 7号杭列（手前）と 8号杭列

1. BW区貝塚上面と4
号橋



2. BW区貝塚
貝層堆積状況



3. BW区貝塚貝層の範
囲全景



図版46



1. BW区南護岸10号杭
列（北東から）



2. BW区南護岸10号杭
列（北西から）



3. BW区北岸
木製品・流木検出状
況（10c層）



1. BW区北岸
最下層（11層）流木
出土状況



2. BW区南東壁
土層堆積状況(南半)



3. BW区南東壁
土層堆積状況(北半)